



今回は祖母の事を書かせていただきます。岩手にいる祖母は、幼少の頃から僕らが遊びに行くと笑顔で歓迎してくれて、畑で採れた手づくりの料理でもてなしてくれました。そして僕の事を「よしおさん」と呼んでくれていました。夏や冬休みに行った岩手のいなかには、果てなく遠く、まるで外国にいる様でした。家の裏から眺める山や田んぼの風景は、お気に入りです。いつも帰る時には、ひそかにその風景を目に焼きつけておいたのを覚えてます。何で「さん」付けで呼ばれていたのか、この年になって少しわかってきたような気がします。僕の印象では、祖母の振る舞いは、だれに対しても平等で、本当に一人一人大切に对应されていた方でした。そんな想いから、「さん」付けで呼んでくれていたのかなと思います。そういえば、昔、いとこに対して「おまえ」と呼んでしまった時、滅多に怒らない父に怒られた覚えがあります。だれに対しても平等で態度を変えないという事、長い年月をかけて、教えてくれた事だと思えます。



昔、小学5年の頃、紐で通された50円玉の束を祖母からおづかいにもらった事が有り、すごく嬉しくて、しばらく大事にとっておき使わせてもらった思い出があります。そのおづかいは、今まで生きてきた中でいたいた、お年玉やおづかいの中でもダントツNo.1にうれしかったです。その方法で今年のお年玉は、50円玉をいくつから集めて、我家の子供達に渡しました。案の上、とても喜んでくれて、大事にとっておくと約束してくれていました。同じ額を渡すにしても、まと祖母は、「お金のありがたみ」を伝える事を目的として、僕ら若い世代へメッセージとして残していくものとおもいます。祖母や、たくさんのお光栄から、教えていただいている事や、この年になって少しづつ、間接的にも、解りかじり始めてきている事に感謝させて頂きたいと思えます。人間として対等に扱ってくれた祖母の思い出、大事にしていきたいと思えます。

平成二十一年五月吉日

多田 良雄